

芭石鉄道 2005年3月19日(土)



成都まで

この年の3月は忙しくて、月初めのNYアート見本市から帰国したのも束の間、2週間も経ずして再び成田空港の出発ゲートをくぐることになるとは。前日の仕事も忙しくて、帰宅したのは深夜おそく、それでも朝は5時に起きてまだ薄暗い曇り空の都心を抜け、ガラ空き的高速道路を車で飛ばし、7時前には第2ターミナルへ到着すると、早朝にもかかわらず、中国国際航空の北京経由成都行きのカウンターには、すでに大勢の乗客が長い列をつくっていて、搭乗手続きに時間がかかり、あたふたと銀行窓口で中国元に両替したのち、出国手続きを済ませ急ぎ足で搭乗口へ向かった。8時55分発CA422便はB757の小ぶりな機体、前方通路側の席に着いて後ろを見ると、ぎっしり満席状態のようだ。

機体がブリッジを離れタクシングで動き出してひと安心していると、どうも隣の窓際席の若い女性の様子がおかしい。ハンカチを目にあてて人目もはばからず、シクシク泣き始めている。飛行機は無神経な轟音をとどろかせて離陸し、悲しみにお構いなく厚い雲の中へ入って上昇していく。はたして恋人との別離なのか、残留孤児とかなにか深刻な事情なのか、その様子があまりにも悲しそうなので思い切って声をかけてみた。李さんという中国人で、なまりはあるものの日本語は流暢で、堰を切ったかのように事情を打ち明け始めた。

彼女は四川省重慶の近くの寒村の出身で、町に出て日本語学校に通っていた時に、教師であった日本人のいまの夫と出会い、結婚を機に来日して現在は栃木県鬼怒川の近くに住んでいるのだという。小学5年生になる一人息子のりゅういち君がいて、今回は数年ぶりの里帰りということで学校の春休み、祖父母や親戚が待つ故郷に一週間の楽しい旅行をする予定だった。りゅういち君も、祖父祖母に会えることをたいそう楽しみにして、いとこ達にサッカーボールやらのおみやげをいっぱい用意して、昨夜は真夜中過ぎに父親の運転する車で家を出て成田に着いて、いざチェックインをしようとした時、初めてりゅういち君のパスポートの有効期限が切れていることがわかって大騒ぎになったのだそうだ。

りゅういちが行けないのなら私も行かない、とお母さんがいうと、お母さんだけでも行ってきてと、彼は泣きながら言ったと、彼女はときどき悲しみがぶりかえすように、私が確認しなかったのが悪いのと、なんども泣きながら話した。なんと言ってなぐさめたらいいのか分からないまま、きつとりゅういち君はこのこととお母さんをうらんだりはしないですよ、涙を出し切ってまたひとつ大人の階段をのぼっていきますよ、などと勝手なことをしゃべっていた。

機内サービスで飲み物や朝食が配られているうちに、若い母親はしだいに落ち着きをとりもどした様子で、その後は話がはずんだ。彼女の生まれた家のある村は、つい最近まで電話は村にひとつだけ、小さい頃は学校に行くときもいつも裸足だった。結婚をして日本に来てからは貯金しては仕送りを欠かさず、その貯まったお金で両親に立派なマンションを買ってあげたのだという。

そんなドラマのような話を聞いたり、かんたんな中国語を教えてもらったりしているうちに、4時間ほどで経由地北京上空にさしかかった。空から見ると初めての中国北京の郊外は、ほとんど緑の木々がなく赤茶けた土ばかりが広がっていて、空気も排気ガスや黄砂のために汚染がひどいのか、褐色の霞みがかかっているように見える。

北京空港に着陸すると、全員自分の手荷物を持って機外へ降ろされ、北京で降りる半数近くの乗客と別れ、成都行と書いた看板を持った人にぞろぞろとついて歩き、無愛想な係官の入国審査を済ませ、再フライトまでの1時間ほど、殺風景なロビーでぼんやりとしていた。

自宅に携帯電話をかけてもいつも通り通話ができるのに、今はもう中国の空港にいることが夢のようだ。機内に戻ってさっきと同じ席、李さんの隣に座る。北京から国内線として搭乗した人も多く、中国人ばかりの乗客になった機内はたいそう賑やかになり雰囲気が一転している。成都までの3時間あまりのフライトは天気が悪くずっと雲上飛行で、眺めが楽しめず残念がっていると、李さんは「キューサイゴー」って、知ってマスか、成都の近くにあってそれは夢のようにきれいで、エメラルド色の水が流れる桃源郷みたいデスヨという。言葉の響きには記憶があったものの、それが世界遺産の九寨溝のことだとわかるにはしばらく時間がかかった。ぜひ一度は行ってみてくださいなどと、そんな話をしているうちに飛行機は降下をはじめ、ガクガクと揺れながら厚い雲の下に出ると、眼下には緑におおわれた大地が広がっていて、北京との対比の妙に驚かされた。

犍為までドライブ

午後4時前に成都空港の穴ぼこだらけの滑走路に無事着陸して、ここでは入国検査もないので、さすが中国人みな我先に出口に突進する様子を見ながら、しんがりになって李さんとふたりでひと気の少なくなった薄暗く長い通路を進み、おおぜいの出迎えの人が待っているロビーに出た。彼女はすぐ弟さんを見つけて泣き笑い顔で抱き合い、教えてもらったツァイ・ジェン再見と言い交すと、はずむようにして去って行った。

名前のプラカードを持っていてすぐに見つかったガイド氏は、ちょい悪オヤジ風に見える30代後半くらいの偉丈夫で名前は石焯さんといい、挨拶もそこそこに車に案内されてガタピシおんぼろの、三菱パジェロ4WDに乗り込んだ。初めて見る中国の町、漢字の看板はなんとなく意味がわかり外国ではないような気がするのに、しゃべると全く意味不明で英語よりもっとわからない不思議。穏やかな曇り空の日曜日の夕方、通り過ぎる成都郊外の建物や景色、どの食堂も道路にテーブルを出して、戸外でわいわいがやがやと食べている姿が物珍しい。案内をしてくれる石さんの流暢な日本語に驚いてたずねると、彼は一度も日本に来たことがなく、独学でしかもラジオの日本語講座だけで勉強したとのこと。

小さい子供がふたりいて、成都にある新しいマンションに住んでいるという。

車はいつのまにか高速道路に入り、どこかなつかしく思えるような田園風景の中、おんぼろバスや荷物満載のトラックをどンドン追い抜いていく。大仏で有名な樂山まで約150キロ、途中でトイレ休憩をした殺風景なパーキングエリアは、いちおう売店があり棚もあるのに商品がほとんどない状態で、車も数台しか止まっていない寂しさだった。途中いくつもある料金所の係員が、みな例外なく若くきれいな女性なので驚いて尋ねると、中国ではこの職業は憧れの的なのだという。

樂山を過ぎて、揚子江の支流のひとつである、岷江の河の流れに沿ってさらに南下していく。小さな町や村を通り過ぎ、田舎になるにつれ自動車からバイク、そして自転車、さらに雨も降ってきたのに傘もささず歩いて行く人々に変わってくる。バイクや自転車では3人乗りはあたりまえ、荷台に物を満載してさらに子供を5人も乗せて道路の真ん中を、堂々と悠揚迫らず走っているため、石さんはクラクションを鳴らしっぱなしだ。夕方近く、暗くなり始めて人家も見当たらない土の道を、ひたすら何処へ行くのか雨に濡れながら歩く人の姿に、あらためて中国まで来た実感がわく。

成都から南へ250キロ、3時間半のドライブで岷江大橋を渡り夕暮れの犍為の街に入る。今夜のホテル天波大酒店は、こんな田舎には不釣り合いなほど立派な建物で、部屋もバスルームも清潔、ミネラルウォーターのボトルサーバーまで用意されていた。すぐに夕食となり案内されたホテルのレストランは、専属ウェイトレス付きの個室で中華テーブルを石さんと二人だけで囲む贅沢。山盛りの大皿料理がどっさり、四川料理独特の山椒の実をつぶした香辛料たっぷりの麻婆豆腐などは日本人には少々つらいものの、石さんはさすがに健啖ぶ

りを発揮してどンドン平らげていた。部屋に戻って窓を開けると、音もなく細かい雨が降っていた。四川省では夜になると決まったように雨が降るのだと、石さんが言っていた。

「巴山夜雨」という言葉を後で知った。

いよいよ芭石鉄道へ（黄村井まで）

夜来の冷たい雨が残る翌朝6時すぎ、街灯もない真っ暗な田舎道を飛ばすこと20分、芭石鉄道の始発駅がある石溪鎮に着いたが、まだ暗くて街の様子がよくわからない。雨がしぼしぼ降るなか坂道を登り石段を上がって行くと、低いプラットホームと線路があるのでかろうじてそこが駅とわかる。

くたびれた長屋風の建物の壁には不釣り合いな真新しい駅名標識があり、始発駅なのに「終点站」となっている。裸電球がまぶしく光っているのが売店食堂らしく、店先のホームでは焚き火の炎が赤々と燃えている。中に入るとほかほか炊き上がった白いごはんが大ざるに盛られスープが湯気を立て、人懐っこい黒い犬のとなりで食べたあつあつの麺入り汁は、見た目より意外に淡白な味わいで、冷えた体がほどよく温まった。

空が白み始めた7時前、おんぼろのC2型蒸気に引かれた一番列車が前照灯を輝かせて姿を現すと、どこからともなく三々五々と乗客も集まり、全身緑のマッチ箱型客車に乗り込む。木製のベンチが両脇に並んだ車内では、一両にひとりずつ色違いの帽子を被った人民服風の女性車掌が切符の集札をしている。ドアの横には手動ブレーキも見える。

ここからスイッチバックの蜜蜂岩駅までは、テンダーヘッド運転。客車の窓にガラスは無く、照明などもないためトンネルでは真っ暗闇になるが、窓が開いていても石炭が良質なのか煤煙は気にならない。スプリングもなさそうな単軸車だがスピードが遅く、揺れは座っていれば大丈夫な程度で、なかなか楽しいおとぎの国の列車のようだ。



15分ほどで蜜蜂岩駅に着くと進行方向が反対になるため、機回しをして素早く機関車を逆に付け替える。外に降りて作業を見ていると、おんぼろSLには見合わない軽快さで、側線を通り過ぎ、ガンガンとバックで戻って来て連結完了、即出発準備完了、しかもその途中で燃え残りの石炭くずを線路に捨てる芸の細かさ。すると大人や子供達もが慣れた手つきでそのガラを集めている。家に持ち帰りストーブの燃料に使うのだそうだ。

小さな車体に似合わない図太い汽笛を鳴らして発車。この先が芭石鉄道一番のハイライト区間、菜の花畑の縁に沿って緩やかにカーブを描くオメガループにさしかかる。棚田いちめんの満開の菜花に合わせたのか、次の停車場の駅名は菜子場。ホームもなにもない畑の中で列車を待っている人がいる。

さらに勾配がきつくなって、ドラフトの音も快調に短いトンネルを幾つかくぐる。線路沿いの犬走りを歩く人、バイクに乗る人の姿が多い。仙人脚の駅には戸板に品物を並べただけのよろず屋も店を開けていた。蜜蜂岩から半時間ほどで沿線唯一の駅らしい駅、芭溝駅に着くとほぼ全員が下りてしまう。線路は一段高い山側を走っているの、黒褐色の瓦屋根に赤いレンガの街並みが一望でき、樹々のなかに点在する家々の煙突からは白い煙がたなびき、遠くは霧雨に霞んでいて、夢幻の天空の城ラピュタを見ている気分だ。次の駅、終点じつは始点駅の黄村井まで乗り通して下車した。列車は休むまもなく、またあわただしく機回しをしてテンダー先頭で発車していった。

黄村駅構内には炭鉱や鉄道関係のレンガ造りの事務所と住居が並んでいる。ひと気もない露天のような店には、スナック菓子や日用品などが並び、雨が上がった線路上には、ニワト

り、ネコ、イヌ、カラスそして豚までもが散歩に出てきたようだ。男がひとりでホッパー貨車を押すのに難儀していたので、ガイドの石さんと後ろから手助けをすることになった。彼は顔なじみなのか中国語で男となにか話をしている。そのあと細い道を難儀しながら崖を上ってみると、そこにもトロッコ用の簡易軌道が敷かれていて、採掘現場の方へ続いているようだ。作業帰りの若い工夫が歩いている。石炭運搬用の古いトロッコが寂しそうに打ち捨てられていた。軌道内でこぼれた石炭を拾いながら世間話をしている女性たちもいる。鳥の鳴き声しか聞こえてこない、廃坑が間近に迫った静かな寒村のたたずまい。

四方は険しい山また山に囲まれていて、鉄道が開通する50年前までは、南側の山を越えて岷江の支流の川まですべて人力で石炭を運んでいて、昔はかなりの高賃金の職場であったと石さんが説明してくれた。

左手には崖が、右下は細い川の流れて続く芭溝駅までの1.5キロほどの線路道をゆっくりと逆に歩いて行く。線路際に面してレンガ造りの家が点在し、どの家の玄関にも赤い布に白い字で、福だとか様々な字を書いた飾りが貼ってあった。旧正月春節の飾りで幸運を招く福字というらしく、薄暗く灰色にすすけた風景の中で、赤い布が幽玄な雰囲気を出している。芭溝の村が見えてきた。赤茶色のレンガの壁に黒い瓦の家並みが幾重にも重なり、煙突からは朝餉の支度だろうか、白い煙が上がっていた。

芭溝にて

ロストワールドの街の中に入ってみる。影劇院の色褪せた看板がある大きな建物は、映画館兼劇場だったようだが、扉には板が打ち付けられていた。そのとなりの郵便局のような建物は、給料などを受け取る場所らしくそこだけ人の出入りがある。静まり返った街の違和感は、車が一台も走っていないことからくるものなのか。線路以外どこからもこの町まで通じる道がないので、クルマが存在しない桃源郷となって外界と隔絶しているのだという。

ちょうど日曜日で、広場では露店市が開かれていた。この廃墟のような街のどこにこんなにも人がいたのかと驚くほどの賑わいで、道端にそのまま無造作に品物を並べて売っている。蒸籠からさかんに湯気を立てていた蒸し饅頭を買って食べながら、あちこちブラブラと歩いてみる。今日は月に一度の大きな市の日にあたり、近在の山奥からも皆買出しにやって来るのだそうだ。洋品店には派手な色使いの子供服が所狭しと天井から吊るしてある。

さらに歩いて行くと、ひときわ大きな建物がああり、入ると集会所と食堂を兼ねた天井の高いホールになっていて、どのテーブルも大勢の老人達に占領されて、ぼんやりタバコをくゆらしている者、中国将棋に興ずる人達、思い思いのゆっくりとした寛いだ時間が流れている。それぞれの手元には、きまって茶葉の入った蓋付きのガラス瓶があり、やかんをもった職員が回っていて、無料でお湯を入れてくれるようだ。石さんが奥のカウンターで買ってきてく

れた肉饅を食べながら、彼に通訳してもらい、ひとりで座っていた老人から話を聞かせてもらった。若い頃からずっとこの炭礦で働いて結婚して子供を育て、定年後は毎日ここに来て、日が一過日過ごしているようだ。子供達は全員都会に出て行き、旧正月の時にしか帰って来ないのだと言う、深く刻まれたしわと黒い指が、この山奥での人生を淡々と過ごしてきた老人の静かな迫力が伝わってくる。どの顔も荒くれの炭鉱夫風情ではなくて、自分の役割を終えたさわやかな充実感につつまれた仙人の群れのなかにいるようだ。



正午近くになり、列車の時間がせまってきたので駅に戻った。おんぼろの小さな屋根があるホームには雑多な荷物を持った人が集まっていて、都会から帰省していたのか洒落た服装にスーツケースを下げた若い女性もいる。その横ではニワトリが落ちている米をついばみ、ブタも乗り込もうと待っている。バイクに乗った若者がホームまで乗り付けてきて、蔓のようなものを大きく巻きつけた奇妙な物をドーンと転がして、また爆音をとどろかして去っていった。すると汽笛一声、黄村駅の方からテンダーフロントの機関車が石炭を満載にした貨車を何両も連結して、白い煙を噴き上げドラフトの蒸気を吐きながら、大迫力で目の前を通過していく。最後尾の貨車のステップには、ブレーキ要員の男がしがみついていた。

トンネルへ入る石炭列車の汽笛が遠ざかったと思うと、近くですれ違ったのかすぐに下り2番列車が到着する。こんなにも思えるほど大勢の乗客が下車すると、一瞬の喧騒に満ちたホームをあとに、車両点検もあわただしく発車して行き、待つほどもなく始点站黄村で折り返してきた上り2番列車に乗り込む。

手をのばせば相手に触れそうな狭い車内、みな顔見知りなのか世間話に花を咲かせている。立ったまま窓から顔を出し、風と煙とブラストの音を聞きながら、菜の花畑の早春の景色を楽しむ。水をたたえた見事な棚田が美しく広がり、レンガ造りの農家が点在する。線路脇の犬走りは道路兼用で、背負子をかついだ農夫や、赤やピンクの派手なジャンパーを着た子供たちも列車が通り過ぎる横を平気で歩いている。次の焦芭では人に混じって豚も乗り込み、ホームのない菜子場でも数人が乗り込んでくる。

ふと気がつく、隣の窓から顔を出して景色を見ている少女がいて目が合った。ピンク色のジャケットに、髪はポニーテールに結わえた中学生だろうか、毎日乗っていて珍しい景色でもないだろうに、飽きもせずずっと外の菜の花畑を眺めている。おもわず日本語のまま「きれいだネー」と声をかけたら、その意味が分かったかのように、コックリうなずいて素敵な笑顔を返してくれた。また石さんに通訳をしてもらって少し話を聞くと、日曜日なのに町の学校だか塾に行く途中で、勉強をして将来は医者になりたいのだそうだ。澄んだきれいな眼差しをした少女だった。

日曜日の昼過ぎ、薄曇りの空も明るくなり、ときおり陽も差して車内にも休日の楽しい空気が漂っている。蜜蜂岩駅に着くと、朝とは逆にフロントに機関車を連結した堂々とした姿で右へ大きくカーブしながら、風を切ってゆるやかな下り勾配を軽快に走っていく。石溪に着くまでポニーテール少女と一緒に、立ったままずっと飽かず外を眺めていた。往復5時間で、もとの終点駅に戻って来た。

石溪镇にて

ホームから急な石段を下りて、石溪の町を散策すると、暗い朝には気づかなかった商店が立ち並び、日曜日の市場が賑わいを見せていた。派手な携帯電話ショップもあり、そういえばあの終点駅の黄村の山奥でもしっかりと、携帯は圏内になっていたことに驚いたものだ。午後からは車で行ける所まで行って写真を撮ろうとパジェロに乗り込み、舗装もない急坂を上って行く。はじめのうちは対岸の線路に沿いながら、すれ違いもできる程度の道で、人家もチラホラ見えていたのが、二股に別れた細い道に入った途端、ぬかるんだ粘土質の泥の道になり、4輪駆動のパジェロでさえ左右にハンドルを取られ、車体の底にゴリゴリと土が当たる音がしている。道路というより底なし沼の道路を走っているようだ。向こうから大きな軍用トラックがやって来て、狭い道ですれ違いにひと苦労する。気が付くと我々の車の前に、小学生くらいの男の子を後ろに乗せたお父さんが運転する小さなバイクが、やはりぬかるみに悪戦苦闘していた。車の轍の跡にタイヤを取られて、転倒しそうになるのをなんとか巧みなハンドル操作で立て直しては、ほとんど歩くくらいのス

ピードで走っている。ダートのモトクロス競技に、出前バイクで挑戦しているかのようだ。男の子はしっかり父親の背中にしがみついているが、もし倒れたら二人共全身泥まみれになってしまいそうだ。しかし父親の運転はサーカスのようにうまい！石さんとふたりで、こちらの車の心配も忘れてしばし見惚れていた。

ぬかるみはさらにひどくなって、ハンドルがほとんど役にたたないほどになり、もう限界これまでとあきらめて引き返すことにした。バイクの親子はとみると、転倒することもなく、見事なアクロバット運転を続けながら、カーブの先に見えなくなってしまった。

やはり噂通り芭石鉄道の撮影は、道路からのアプローチがまったく不可能だと実感することになった。けっきょく石溪の近くまで戻り、遠く対岸に線路を望むトンネル間の直線区間で撮影を試みることにした。三脚に望遠ビデオカメラをセットして準備万端、時間を見て下り旅客列車の通過を待つが、20分経ってもそれらしい気配がない。おかしい、もう通過したあとなのかなあーとあきらめかけたその時、ポオーと汽笛の音が響き渡る。やった！来た！と喜び勇んでカメラのファインダーを覗いていると、なんとやって来たのはバック運転の単機のみ。こちらの落胆をものともせず、ノンビリひとり旅を楽しむように、白煙と汽笛を残しながら視界から消えていってしまった。石さんと顔を見合わせて出たのは、ため息と苦笑이었다。

芭石鉄道フォーエバー

さて時計はもう3時近く、夜までに成都に帰るためには、そろそろ帰途につかなくてはならない。明日にはもうひとつのメインイベント、北京までの24時間の夜行列車の旅が控えている。成都までの帰り道は、きのう来た時とは違う道を通っているようで、いくつかの小さな町と村を過ぎて、五通橋という賑やかな町にさしかかった。

いく筋もの川にはさまれた街で、名前のおり複雑に蛇行している川をまたいで何本もの橋がかかり、河畔沿いの道には小綺麗な商店が立ち並び、柳並木が川面に影を落としている。人力車が行き交い、休日の散歩を楽しむ人々であふれている。風光明媚なヨーロッパの保養地に来たみたいだ。スピードを落として走る車のなかで、そんな感想を言うと石さんは、じゃあ少し町を歩いてみますか、町の外れで待っていますよと車を止めてくれた。

手ぶらで車を降りて、地元の人に混じって川沿いの道のそぞろ歩きを楽しんでみる。ガイドブックをみると、この五通橋は四川省の「水の町」と呼ばれ、百年を越す木々が茂る美しい街と紹介されている。しゃれたブティック風の店や、湯気をたてる饅頭を売る店などをのぞきながら、地元の人に混じり半時間ほどのブラブラ散歩をして、先で待っていた車に乗り込んだ。観光地の華やかさはないけれど、いつかのんびり滞在してみたい美しい街だ。

車は高速道路に入り、見渡す限り菜の花畑が広がる平原や、茶畑におおわれた小高い丘陵のふもとを快調に飛ばしていく。この辺りは天福茶という銘茶の産地でもあるらしい。

夕闇がせまるころ成都に無事戻ってきた。しかしさっきから身体が熱っぽく頭痛もするようで、今朝早くからの強行軍がたたって疲れが出てしまったのか、明日の夜行乗り鉄に黄色信号が！これでは言葉も分からない車内で北京まで一昼夜大丈夫だろうか、と弱気の虫がおこってしまい、石さんに相談するとその状態では中国の夜行列車は無理です、直行便の飛行機で帰ったほうがいいでしょうとのアドバイスで、急遽携帯電話で飛行機のチケットを手配してもらった。夕食は市内にあるカフェテリア屋風食堂で早々にすませ、ホテルまで送ってもらうと持参の葛根湯を飲んで、ベッドに倒れこんでしまった。

翌朝は熟睡できたからか、幸い熱も頭痛も回復していてひと安心。カーテンを開けて外を見るとやはり夜中に雨が降ったらしく、道路が濡れて光っている。驚いたことに、朝食をとったレストランの客ほとんどが若い日本人で、どうやら料理専門学校の卒業旅行らしく、今どきの若者言葉が日本語で飛び交っていて不思議な感じだった。

ほどなく迎えに来てくれた石さんの車で空港まで送ってもらった。途中の広い道路の両側には、建設中のマンションがひしめくように立ち並び、ピカピカのベンツが、廃車寸前のおんぼろオート3輪を蹴散らして走る高速道路、新旧の文化、貧富の差、光と闇が入り交じる混沌をかかえる中国の今、芭石鉄道がよりいっそう桃源郷のように思えてくる。

成田へ向かう飛行機の中で、出会った人々や風景を思い出していた。地図にも載らないロストワールドの光景。石溪、蜜蜂岩、菜子場、仙人脚、芭溝鎮、五通橋、それぞれがどれもなんという魅力的な名前なのか。飛行機は北京を経由して東シナ海にさしかかる頃、早くも夜のとばりに包まれての夜間飛行となり、21時過ぎ成田空港に着陸した。

終